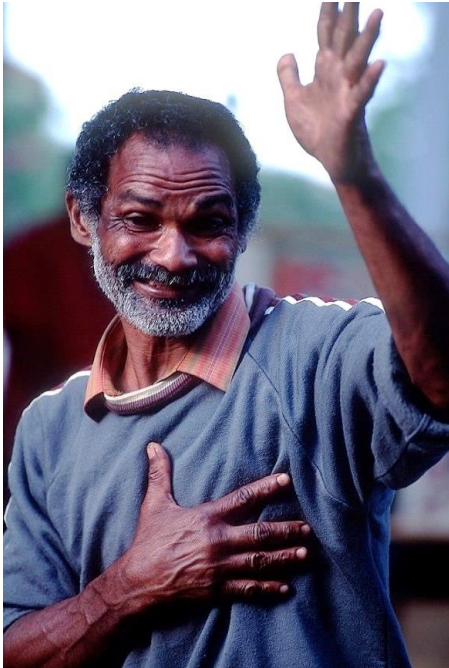


自根 金の  
キューバの呪い ③

# 「世界中の富を積み上げても キューバ人のプライドは買えない」



## 野良犬の自由

取材仕事と撮影を適当にこなしながら、崩れかかった旧市街の通りを歩く。やみくもに歩きながら、方向感覚と勘を研ぎ澄ましていく。身体を包む大気は重く蒸し暑いが、海から吹きこむ風はさわやかで足が軽く宙を滑る。ふしぎな浮遊感だ。

歩きまわるに連れて、次第にこの国が、というかヘンな空気がじわじわと取り囲んでくるのが感じられてきた。社会主義圏特有の効率の悪さ、サービス精神の欠如、どうにも融通の利かない官僚体質、などなど、あげ始めれば切りがない。

つまりは建前最優先というヤツで、どこかしらソ連の影が漂う。空席だらけでがらがらのレストランに並ぶ行列。薄暗い配給所に半日間でも立ち尽くす人々。投げやりに対応するホテルの従業員。まったく仕事する気配のない役所の担当……。

誰しもが諦めたような表情をしながら、しかしまた同時にあきれほど明るいのはなぜだろうか。そして、どこに行っても誰と会っても、そこには必ずフィデルの存在が影のようにつきまとっていた。イデオロギーとはまた離れた、なにか別の原理が働くように、だ。

国家元首、独裁者、革命家、指導者、つまりキューバ共産党第一書記であり革命評議会議長、革命軍最高司令官、

権力のすべてが彼一人に集約する。しかも、どこの誰よりも愛されている。そもそも、国民が独裁者を「フィデル」とファーストネームで呼ぶ国があるだろうか。権力の頂点に君臨しながら、これほど民衆との距離が近い存在は聞いたこともない。強いられることなく、これほど慕われている権力者がいたのだろうか。銅像ひとつない。自ら、不要な偶像崇拜を法的に封じてしまったのだ。

国是として平等を律義なまでに追求しようとするキューバは、やはり特殊な例なのだろうか。もはやとっくに手垢まみれになっていたはずの「体制」などという言葉が、この国では大きな顔で人民を仕切っている。あらゆる場面に政治がコミットする。政治から決して逃れられない運命に、大気中の微粒子までフィデルの息遣いが漂っていた。

しかし、それは大した重みではない。人々はバカのように笑い、ストレートに怒り、感情を隠すことを知らない。議論が始まれば、政治ネタであれ遠慮なく怒鳴り合う。辛抱強く行列に並び、文句は言っても幸せそうにお喋りを続ける。建物は傾き、雨が降れば街路は文字どおり川と化す。壊れた雨どいから滝のように落ちる雨水を頭に受けて、笑い転げる子供たちの嘘いつわりない健康さが、ほかの途上国とは際立って違う。社会主義とは貧困の分配である、と解説されてきたが、ここはもしかすると例外中の例外だろうか。世界の辺境のさらに極北なのか。

それにしても、野良犬の生活の悲惨なこと。

「キューバで自由に生きるってことは、疥癬まみれで暑さに喘ぐ道端の犬になることさ」

道端で暑さに呻いている野良犬の写真を撮っていたら、いきなり後ろから話しかけられた。ただの不良っぽく見える。どうにも私服警官や秘密警察には見えないすさんだ風体が、精一杯の自己主張らしい。短い半袖から左腕に彫られた十字架のタトゥーがのぞいている。長くのびた髪もキリスト風か。

「確かにこの国では医療も教育も無償だ。食料も最低限は配給で手に入る。年に2枚シャツが配給される。10歳まで誕生日には国からバースデーケーキまでもらえる。でも、それは何も選択できないってことでもある」

言いたいだけいうと、男は背を向けて瞬間に姿を消した。何も選べない国——。本当にそうなのだろうか。選ぶどころか、まったく手にできない国だっていくらでもある。少なくとも飢えて死ぬ恐怖、病に蝕まれ苦しむ恐怖を忘れて暮らせるのはありがたいことではないのか。

道端で生まれ死んでゆくホームレスや学校に行けないストリート・チルドレンなんて、世界中どこに行ってもいやというほどお目にかかれるぜ。聞いてみたいことはたくさんあったが、十字架のキリスト男は足音さえ残さず消えてしまった。

人々の本音を知りたい。いくら建前が先行していても、本音はどこでもまた別の文脈で語られるものだ。怪しい英語で話しかけてくる自称ガイドや葉巻売りのあんちゃんから、UJC（共産主義青年同盟）の幹部やCDR（革命防衛委員会）のリーダーまで、出くわすさまざまな人々に本音を問いかけてみた。

もちろん職業や立場で、答えもそれぞれ、反応は千差万別。加えて、なるほど異様なまでにプライドが高い。「世界中の富を積み上げてもキューバ人のプライドは買えない」という諺があるぐらいで、根拠のない自信に充ちあふれている。

ただ共通するのは、ややもすれば狭い世界に生きている、という感じだろうか。かといって、極端に偏っているわけでもないし、全体のレベルはけっこう高いことがうかがえる。とりわけ、革命前を知る老人たちの話はおもしろい。

テラスのロッキング・チェアを揺らしながら通りを眺めるだけの老人たちが、カーニバルの季節が巡ってきたとたんにシャキッと踊り出すのは、革命前も後も変わらぬハバナの風物詩だったようだ。

「革命の後もカーニバルになると、海沿いのマレコン大通りにあちこちの職場チームのコンパルサが次々に出てきたもんだ。とくに、70年代の終わりから80年代の初めは社会主義なんか知ったこっちゃないとばかりに気合が入っていたもんさ」

マレコンのパレードで最強の砂糖公団を筆頭に、宿敵の工業省や漁業省の山車が登場しては豪華さを競い合った時代だ。

「見物客がマレコンからこぼれ落ちそうになるほどの人出で、パレードの最中に仕掛け花火が燃え移って火事になった山車を観客が総出で海に投げ込んだこともあったなあ。カーニバルの間はビールからラム酒やサンドイッチも配給になって、老若男女みんなが心底楽しんでいたもんだよ……」

まさしくキューバの呪いに絡め取られた瞬間だった。カーニバルをこの目で見なくては、その現場に立ち合わなくては、かくして、先の見えないキューバ通いは自動的に始まってしまったのであった。（続く）

しらね ぜん

日本で唯一、世界中でも2人しかいないカーニバル評論家、ラテン系写真家。東京出身。青山学院大学卒。仕事（撮影取材調査渉外観察記録編集企画制作など）その他（探検冒険踏破潜入縦断横断登攀釣魚沈没など）さまざまな理由で現地に入り浸っている。人類400万年の旅グレートジャーニーのサポート、コーディネートも担当。これまでに訪れた国は、6大陸、150カ国超。ラテンアメリカとカリブ海域の主なカーニバルはすべて制覇。定点観測と路上観察を続けているキューバは、1989年以来、30回目の訪問をマークした。



## 写真家 チェ・ゲバラが見た世界 8月9日(水)~27日(日) 11:00~20:00

恵比寿ガーデンプレイス ザ・ガーデンルーム

〒153-0062 東京都目黒区三田1丁目1-13-2  
TEL 03-5423-7111

JR「恵比寿駅」東口から動く通路「恵比寿スカイウォーク」で約5分。雨の日でも傘なしで濡れずにアクセスできます。

没後50年、チェ・ゲバラは何を見つめ、  
夢を見たのか

自身が撮影した写真、約240点を日本初展示

平和と平等をもたらすために戦った

チェ・ゲバラの傍らには  
いつもカメラがあった。

彼は何を成し遂げ、  
何を夢見ていたのか？

世の中が転換期を  
迎えようとしている今、

チェ・ゲバラが  
ファインダー越しに見た世界を  
体感する展覧会を開催。

彼の息子カミーロ・ゲバラ氏の  
全面協力により「チェ・ゲバラが自身で撮影した写真」、  
約240点を日本初公開する。

